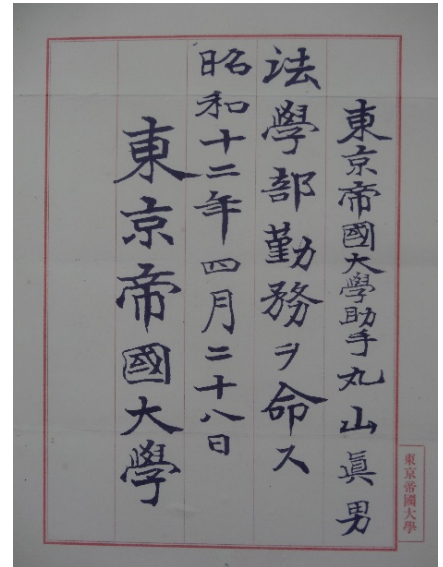


(1) 助手時代

1937(昭和12)年3月に東京帝国大学法学部を卒業した丸山眞男は、4月に同学部助手に採用された(助手の辞令〈丸山彰氏所蔵〉)。7月には日中戦争がはじまり、加速度的に世情が悪化していくなかで、丸山は南原繁の指導を受けながら日本政治思想史専攻の研究者としての道を歩んでいく。



助手時代に丸山は南原繁の指示で、東京帝国大学文学部の「日本思想史」講義(平泉澄担当)と「日本倫理思想史」

講義(和辻哲郎担当)を聴講した。いずれも天皇機関説事件後に行われた国体明徴運動の一環として設置された「国体学」講座だった。法学部に設置された「国体学」講座は「政治学、政治学史第三講座」(「東洋政治思想史」)であり、初年度は早稲田大学教授の津田左右吉、その後は東北帝国大学教授の村岡典嗣が担当した(いずれも非常勤講師)。村岡の後にこの講義を担当したのは丸山自身である。

丸山は津田と村岡の講義に出席したが、1939(昭和14)年12月に行われた津田の講義の最終回では、出席していた右翼学生が津田を質問攻めにする場面に遭遇している。このとき丸山は津田をかばい、強引に外に逃したという。やがて津田に対する国粹主義団体の攻撃が激化し、1940(昭和15)年1月に津田は早稲田大学教授を辞職。翌月には津田が岩波書店から出版していた日本神話と日本古代史に関する4冊の著書が発行禁止処分となり、3月には津田と岩波書店の岩波茂雄が出版法違反で起訴されるに至った。すでに1939年には

東京帝国大学でいわゆる平賀肅学があり、河合栄治郎や蠟山政道が教授職を辞していたが、思想統制の矛先は丸山の専門領域にまで及んできたのである。丸山は南原の意を受けて、津田の無罪判決を求める上申書への署名集めに奔走している。

専攻した東洋政治思想史の分野で丸山は、儒学の古典、江戸時代の儒学者・国学者の著作の研究に打ち込み、やがて江戸中期の儒学者・荻生徂徠（1666～1728）の学問に着目していく。助手には任期中に論文執筆が義務づけられており、丸山が書き上げたのは「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」と題する論文だった。この論文で丸山は、荻生徂徠による朱子学批判から本居宣長の国学に至る江戸時代思想史の展開のうちに、「公的」な領域と「私的」な領域を分離し、後者を道徳的・政治的統制から「解放」という「近代的意識」の成長を跡づけようと試みている。